

# 2 学年通信

新宮町立新宮東中学校  
令和8年3月5日 第96号  
文責:江頭 俊輔

[もうすぐ春ですね。]

少しずつ気温が高くなってきて、春の訪れを感じる気候になってきました。本筋と逸れるのですが、みなさんは「小春日和（こはるびより）」という言葉を知っていますか？「小春日和」は「春」とつきませんが、11月～12月初旬の穏やかで暖かな晴天の日をさします。春に「小春日和」と使わないことは豆知識として覚えておくと役に立ちそうです。（ちなみに正確には『春日和』と言うそうです。そのままですね。）天気の話は誰とでもできる話題なので、知識を増やしておくことをおすすめします。

春といえば、何を思い浮かべますか？「卒業・入学・新生活」「花粉症」「ひな祭り」「エイプリルフール」などなど、いろいろあると思いますが、一番に思い浮かぶのは「桜」でしょう。日本は古代から、春といえば桜、桜といえば、春という認識が大切にされ、現代まで受け継がれています。こういう日本人としての感覚はバトンとして未来に引き継ぎたいですね。今回は「春」について考えていきましょう。

[桜といえば]

桜といえばみなさんも同じ意見と思いますが、古くから詩歌的ですよね。桜をテーマにした詩歌の中で最も好きなものは何ですか？みなさん大好き在原業平の歌はとても趣深いです。

## 世の中に絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし

意味は、現代語で訳すると「世の中に桜が一本もなかったら、私たちの春の心はのどかだっただろうなあ」でみたいな感じでしょうか。「のどか」は落ち着いて、大らかにとかそんな理解でもいいと思います。古文の文法として面白いのは、「～せば、…まし」という『反実仮想』という表現が使われていることです。実際に「桜」を見ながら、「桜がなかったらのどかだっただのになあ」と現実にはあり得ないことを想像することで、【桜は現実にはあるから、心が揺れ動いちゃうなあ】と強調しているのが素敵です。（詳しくは国語科の菊池先生に聞いてみてください！）

江頭が強調したいのは、この歌から漂う「桜があるから、春はときめいちゃうな～」という在原業平のスキップするような躍動感です。しかもそれを反実仮想しちゃって、強調しちゃってます。春って桜のおかげで、なんかそういうふわっとした気持ちになりませんか？



[よー、そこの若いの/竹原ピストル]

少し脱線するんですが、竹原ピストルさんの『よー、そこの若いの』という曲を知っていますか？2015年に発表され、当時、若かった江頭はずっと聴いていました。出だしの歌詞が素敵で感慨深いので、一緒に確認したいです。（左下図）私もよくやってしまって、自分で反省することが多いですが、私たちは「あから

とかく忘れてしまいがちだけど  
とかく錯覚してしまいがちだけど  
たとえば桜やらひまわりやらが  
特別あからさまなだけで  
季節を知らせない花なんてないのさ

さまで、目立つものだけで、物事を判断してしまいがち」ではないですか？そんな私たちの「注目してしまっ癖」に問題提起を投げかけてくれるのがこの歌詞です。「季節を知らせない花なんてない」とは、どの花も季節を知らせてくれる、道ばたのあの花にも目を向けようと伝えているようです。この曲のサビは「君だけの花を咲かせたらいいさ」と自信をくれます。いろんな花があっていい。みんなそれぞれ頑張っている。と。

象徴だけでなく、ひとつひとつを、ひとりひとりをあたたかい気持ちで大切に思う春にしましょう。